



農作業を一緒にすることで 子どもに伝わるものがある。

25歳の時に上越市吉川区川谷に移住。現在、3人の娘の父親となった天明さん。
農業には子育てに活かせる部分も多々あるという。お話を聞いてみた。

農園「星の谷ファーム」経営 天明伸浩さん

新潟へ移住し、生活を営んでいくのであれば、仕事以外にも気になることは多いのでは。そのひとつが「子育て」だろう。天明さんが「米作りがしたい」と新潟へ移住してきたのは1995年。現在では奥さんと一緒に農業を営みながら、3人の娘を育てている。

「小学校も中学校もバスで通っています。だいたい片道20分くらい。帰りが遅い時は車で迎えにも行きます。家で面と向かってよりも、車の中のほうが話しやすいんですね。貴重な時間なんじゃないかなあ」

農作業は、コンバインなどの機械を使用する。田んぼに子どもがいると危険なため、現在では稲刈りなどを子どもに手伝わせる農家は少なくなった。だが、天明さんはあえて「子どもの役割」を作って参加させている。

「子どもが“手伝った”という達成感

を味わいつつ、親としても“やってもらって助かった”という仕事をしてもらうようにしています。そうじゃないと意味がないと思うので」

農繁期には、子どもの仕事も増える。食事の支度やお風呂掃除、洗濯といった家事を子どもたちは分担する。

「一家をまわす時に、そこに子どもも組み込まれていると意識してもらいたいです。子どもだから遊んでいれば

いい、ではなくて、家の中で役割分担をして、やれることはやらせたい」

農業は暮らしのすぐそばに仕事がある。それは、子どもが親のONの顔とOFFの顔をどちらも見ながら生活するということだ。

「仕事を一緒にすることで、言葉よりも伝わるものがあると思うんですね。でも、あまり押し付けはせず、まずは楽しめることを大事にしています」



3人の娘さん達と一緒に、山登りや釣りに出かけることも。



颯爽とトラクターにまたがるのは、奥さんの香織さん。

